

令和6年度 長野県南信工科短期大学校 事業計画・評価表

目標	大項目 (VISION)	事業計画		具体的取組		実 績	分 析	外部評価委員会評価				委員コメント	令和7年度課題（取組） (注) 赤字は新規の取組			
		小項目（取組）	評価項目	本年度（令和6年度）の主な取組 (注) 赤字は新規の取組							委員A			委員B	委員C	委員D
教 育	社会に期待される人材教育	・ 予定した授業の実施 ・ 専門的知識の修得状況 ・ 実践力の向上	○地域企業の課題をテーマとした卒業研究及び共同教育の実施。 ○VR技術や生成AI、産業用ロボットに関する授業の検討。 ○新しく導入された協働ロボットを使用した実習を実施。	○生成AIを活用した未来のサービスについて発表資料を作成する授業を実施。 ○機械システム学科2年生に協働ロボットの特別教育を実施。 ○地域企業の課題をテーマとした「デジタルモールド粉末冶金」等の卒業研究を実施。 ○地域共同開発の「アスバラガス収穫機」に関する卒業研究を実施。	○生成AIについては、後期の授業で実施し生成AIの使い方、注意点、可能性及び限界について学んだ。 ○協働ロボット実習は将来的に重要課題であり、企業ニーズも最近急速に高まっているため、さらに充実する必要がある。	a	s	a	a	○今後の人手不足などを補う手法として大変重要な課題。取組みの効果についての随時検証をお願いしたい。 ○生成AIや協働ロボットの取組など、時代のトレンドにマッチしたカリキュラムを積極的に取り入れていて、学生の向学心にも好影響があり、実践力、即戦力に対し効果が大きい。 ○地域企業、産業と密着した共同研究を学生の教育に反映しているのは、当校の本来あるべき姿を追求している。 ○実績、分析に記載は無いが、社会学や学生向け研修なども社会に期待される人材教育の一環として大変評価されると思う。 ○地域の課題・ニーズを反映した共同開発による卒業研究等が充実しており、地域に期待される人材育成が行われている。	○3DカメラやAI等の周辺機器の活用やNC工作機械との連携など、協働ロボットの実習の充実化を検討する。 ○卒業研究の一環として、3Dプリンタに関する地域企業の課題に関わる共同研究を実施する。 ○学生の授業の受講機会を増やすため、選択科目（線形代数学・工業数学・力学）を全学生対象のオンデマンド授業とする。 ○卒業研究の一環として、信州大学農学部と培養装置の開発についての共同研究を実施する。 ○卒業研究の一環として、地域企業と「水位センサ」の開発についての共同開発を実施する。					
	学校生活の充実	・ 予定した取組の実施状況 ・ 学生満足度	○日本語表現授業に、就職に必要なスキル向上のための内容を取り入れるよう提案。	○日本語表現の授業に”履歴書の書き方”を取り入れた。 ○編入学を希望する学生向けの選択科目をオンデマンド授業とし、全学生が受講できるようにした。	○授業の中に、就職に必要なスキル向上を目指す内容を取り入れる取り組みが必要。 ○選択科目をオンデマンド授業とした結果、編入学を希望しない学生の受講生の増加にも繋がった。	a	s	a	a	○専門以外の教養教育の充実は重要なため、更なる充実を期待する。 ○学生の将来の進路選択へのサポートが出来ている。 ○学生アンケートにおいても、学校生活が楽しいという回答がほとんどを占め、また、よい友人・仲間づくりができたというコメントも多く、学生生活の充実が見てとれる。	○授業内容について、学生アンケート等を参考に担当教員と相談し、改善・充実を図る。 ○大芝イルミネーションフェスティバルへ出展する。（1作品以上）					
学生の就職支援	・ リクルート支援 学生へのアンケート、就職率	○相談・支援の充実。 ○南信工科短大振興会への入会の促進。	○入会企業数：230社（昨年度）→236社（本年度末）に増加。 ○校内企業研究会（合同企業説明会）に120社が参加。昨年度より20社増加。 ○インターンシップ説明会をより多くの企業の話を聞けるように形態を変更。 ○就職希望者全員が内定。	○学校見学に訪れた企業等に対して、振興会の活動を積極的に紹介するなどしてきた結果と思われる。	a	s	a	a	○全員の進路が決まったことは良い成果である。 ○積極的に必要十分な取組を行っており、実績も確実に出ている。 ○卒業生の一番の受け皿である南信工科短大振興会会員との連携や、会員入会促進の活動も素晴らしい。 ○学生へのアンケートの充実と今後の活かし方に期待したい。 ○就職希望者全員が内定を果たしており、就職支援が充実していると認められる。振興会所属の各企業との連携をより深めるよう、さらに取り組まれない。	○「日本語表現」の授業において、履歴書の事前添削を行い、就職活動の充実を図る。 ○昨年度までインターンシップ説明会を体育館で実施していたが、暑さ対策と労力削減のため会場を外郭施設に変更する。また、1日あたりの実施回数を増やし、多くの企業の話を聞けるよう工夫する。 ○外部の就職支援サイト（キャリアスUD）も活用し、企業情報が学生に届きやすくなるよう工夫する。						
4 年制大学への編入学制度の確立	・ 編入学試験に係る募集制度等の整備	○単位互換制度（もしくは科目等履修生における受講料等の非徴収）の整備。 ○本校の人文科学分野一般教育科目及び専門基礎科目の充実。（4科目を新たに追加） ○編入学合格者のフォローを、編入先大学の教員と協力して実施。	○人文科学「日本語表現」を第4期に、専門基礎科目「線形代数学」、「力学」、「工業数学」を第2期に開講。 ○信州大学オンライン講座を、前期3名及び後期2名が受講。 ○本年度の実績は、信州大学工学部が受験者3名中、合格者なし。諏訪東京理科大学工学部が受験者1名中、合格者1名。 ○合格者に課された課題について、適切に進捗確認を実施。	○編入学の学科試験の難度が高く、本校教育の延長線上では到達できないレベルにある。特別な強化が必要になれば、教員側の負担が増える可能性が高いため、非常勤講師等による「選択科目」の充実が必要。 ○職能短大の標準カリキュラムには教養科目が少ないため、4年制大学への3学年に編入できたとしても、卒業までには実質的に3年間を要することが予想されるため、非常勤講師等による「選択科目」の充実が必要。	a	s	a	a	○まずは1名でも編入ができたことは大きな成果。これが次に繋がっていくと良い。 ○具体的に制度が整備され一歩前進した。 ○早々に東京理科大学への合格者が出たことは非常に嬉しい。 ○壁は高くとも、当校において編入も可能となる教育がされていることが地域に浸透していくことは、将来の当校の評価向上に繋がる。 ○これからの取組次第だと思う。 ○諏訪東京理科大学への編入実績は出ているものの、信州大学へは未だ実績がないため、非常勤講師等による選択科目の充実等により、実績が得られるよう取り組まれたたい。	○教養科目の更なる充実を検討する。 ○編入学希望者については、引き続き信州大学オンライン講座の受講を勧めると共に、受験対策として個別指導を実施する。 ○選択科目3科目は編入希望者のみならず全員が受講可能とし、対面授業や通信添削、またはそのハイブリッド授業として開講する。 ○編入学合格者のフォローを編入先大学の教員と協力して実施する。						
研 究	研究の推進	・ 研究取組数 ・ 研究活動の内容 ・ 共同研究実施件数	○学会発表や学術専門誌への投稿数の増加。（原著論文発表数：年間3報以上） ○地域企業や教育機関等との共同研究の推進。（3テーマ） ○論文作成と投稿の支援。（論文出版費及び学会参加費の補助）	○本年度は国際専門誌1、国内学会口頭発表2。 ○飯田短大と咀嚼機能向上に関する共同研究（「かみかみ大使カミン」の共同開発）の研究成果についてプレス会見を開催し、テレビや新聞等の多くのメディアで報道。 ○本年度の地域企業との共同研究4件。（荒川教授1、中島教授1、岡本講師1、松原教授1）	○論文発表や地域企業等との共同研究を展開する教員がいる一方で、教育に軸足を置いている教員もいる。教育重視の教員も保有技術のレベルは高いため、分野がマッチすれば共同研究への直結も見込まれる。 ○研究機関としてのひとつの基準である学術専門誌への原著論文の年間発表数3をクリアするため、論文作成支援策を充実する必要がある。	b	a	b	b	○学術専門誌ばかりでなく、業界誌などへの投稿も検討されると良い。技術力の高さをアピールする手段としては、オリジナルペーパーのみにこだわる必要はない。 ○企業との共同研究テーマの取組、南信工科短大振興会の研究費補助テーマの取組、研究に関する記者会見の実施など、計画以上の実績である。 ○今後、更に研究の充実や成果に期待したいが、自己中心的な研究だけでなく産業や社会の発展を強く意識したテーマに取り組み、またできるだけ広く社会に公表することも充実されたたい。 ○地域企業との共同研究の実績はあるものの、教育に軸足を置いている教員もいる中で、持てる保有技術の高さを活かして、より多くの地域企業の課題に対応した共同研究の拡充に取り組まれたたい。	○教員それぞれが保有する技術を、地域企業に展開できるようにするため、HPに教員紹介ページに加えて「紀要」のアーカイブページを開設する。 ○原著論文の年間発表数3をクリアするため、論文作成支援策（研究費・論文添削費・共同研究紹介等）を充実する。 ○卒業研究の一環として、3Dプリンタに関する地域企業の課題に関わる共同研究を実施する。（再掲） ○卒業研究の一環として、信州大学農学部と培養装置の開発についての共同研究を実施する。（再掲） ○卒業研究の一環として、地域企業と「水位センサ」の開発についての共同開発を実施する。（再掲） ○飯田短大と咀嚼機能向上に関する共同研究（「かみかみ大使カミン」の共同開発）について、実証実験で明らかになった課題を解決するために改良を進める。					
SDGs達成に向けた取組	・ 達成に向けた取組及び目標設定	○SDGs関連授業（小水力発電等の自然エネルギー関連ほか）の実施。（3回） ○研究テーマの設定と実施。（1テーマ以上）	○栗田氏の再生可能エネルギーに関する授業を3回実施。 ○共同研究として、地域企業が開発したCO2排出量可視化システムの実証実験を実施。	○大芝高原での実験により、当地での利用が可能なることを実証した。	b	a	b	b	○予定どおり実施できたが、取組の充実度、成果、将来性については、現時点では分らない。 ○大芝湖における小水力発電の実験やCO2排出量可視化システムの共同研究など、SDGs達成に向けた取組が行われている。	○SDGs関連授業を継続実施する。（3回以上） ○校内の空調設備に、CO2排出量可視化システムを設置し、電力量を可視化しながら実証実験を進める。						
地域社会への貢献	・ 技術支援実施件数	○技術相談（連携協定締結機関からの紹介を含む）の充実。（3件以上） ○地域プロジェクトへの参画。（2件）	○伊那市からの委託により市内企業向けIoTハンズオンセミナー（4回）の講師を担当。 ○県内企業3社からの要請により、それぞれ6回、7回、5回の現地技術講座を実施。 ○上伊那産業振興会が伊那市から委託されているアスバラガス自動刈取機開発及び市内企業のスマート工場化に参画。 ○安価な「水位センサ」の開発について相談。	○技術相談や学校見学には、引き続き積極的に対応していく。 ○2つの地域プロジェクトの1つ、アスバラガス自動刈取機開発では本校教員が技術リーダーとなり、民間企業4社を統括して開発を進めている。これらを通して、地域企業のレベルアップに貢献していく。	b	a	a	a	○通常の職務に追われる中、予定を超え良く対応されている。 ○やや教員任せの感や取り組み教員が偏っているとも思われるので、技術支援に対する当校の立ち位置、制度も整備されたい。 ○上伊那地域の農業として力を入れようとしているアスバラガス生産について、自動刈取機の開発を行い、本校教員が技術リーダーとなり民間企業4社を統括して開発を進めているなど、地域の課題・ニーズに的確に対応している。	○アスバラガス自動刈取機の研究は次の段階である社会実装を目指して開発を継続する。 ○伊那市主催のIoTツール実習セミナーを通じて、スマート化企業の創出を支援する。 ○振興会企業への画像処理検査に関する技術支援（もしくは共同研究）について検討する。 ○卒業研究の一環として、3Dプリンタに関する地域企業の課題に関わる共同研究を実施する。（再掲） ○卒業研究の一環として、信州大学農学部と培養装置の開発についての共同研究を実施する。（再掲） ○卒業研究の一環として、地域企業と「水位センサ」の開発についての共同開発を実施する。（再掲）						
地域貢献	・ 地域イベント数 ・ 参加者のアンケート内容	○科学ふれあいフェアの開催。（1回） ○小学校・中学校専門クラブ体験講座等の実施。（3回） ○高大連携（インターンシップ受入）の実施。（1回以上） ○伊那市中学校キャリアフェスティバルに参加。	○科学ふれあいフェアは10月5日（土）開催、近隣22小学校等から保護者含め651名が参加。 ○体験講座等は夏休み期間中に2回、秋に1回、合計3回実施。 ○伊那小の総合的学習へのアドバイス協力を実施。学生と共に、数回小学校を訪問。 ○中学生向けにプログラミング講座（デジタルマスター講座）を実施。 ○インターンシップは、駒ヶ根工業高校2年生13名、岡谷工業高校2年生1名を対象に3日間実施。	○幼少期から科学に触れ、将来は理工系人材として地域を支える期待を持って各イベントを実施している。 ○工業高校との連携は本校受験に繋がることが期待される。令和7年度以降も充実していく。	a	s	b	a	○学生やOBの力も借りて行っていくとさらに良い。 ○他の取り組み同様、教職員は通常職務に追われる中で相当努力されているし、成果も上がり地域への浸透も進んでいる。 ○運営協議会でも話題に上がったが、中学生への対応など振興会や周りの団体と協力して強化したい。 ○どうしても参加対象が地元偏りがちであるが、基本的に当校がカバーする南信という地域全体にどう対応するかが課題と思う。 ○小学生や高校生を対象としたイベントや体験講座等は充実しているものの、将来の進路について考え出す頃であろう中学生へのアプローチが弱い。上伊那産業振興会も参加する「郷土愛プロジェクト」とも連携して、特に中学生をターゲットとした総合的学習などの取組を強化されたい。	○キッズものづくりフェア（旧科学ふれあいフェア）を開催する。（1回） ○公民館活動（2件以上）を支援する。 ○中学生向け「デジタルマスター講座」（プログラミング講座）を実施する。 ○インターンシップ受入れを実施する。（3日間×2高校） ○伊那市中学校キャリアフェスティバルに参加する。						

目標	大項目 (VISION)	事業計画		具体的取組		実 績	分 析	外部評価委員会評価				委員コメント	令和7年度課題（取組） （注）赤字は新規の取組																																															
		小項目（取組）	評価項目	本年度（令和6年度）の主な取組 （注）赤字は新規の取組																																																								
									委員A	委員B	委員C			委員D																																														
学校運営	校内の学習環境の整備	・外観の変化（植栽実施、敷地内の整備状況）	○正面入口付近を中心とした植栽の実施及び日常的な整備。（コニファー約20本） ○コニファー等の植栽は来校者に好評であった。	○9月に植栽完了。（コニファー20本） （南信工科短大振興会による支援） ○付近の県道4箇所へ案内看板の設置。	○施工予定箇所に予定の本数を植栽し、学校正面入口付近のイメージアップを図った。 ○コニファー等の植栽は来校者に好評であった。	b	a	b	b	○計画どおり植栽などを実施し、教育機関としての外観向上に繋がった。 ○校名を表示した案内看板について、もう少し目立つものを設置されるようお願いしたい。	○学校正門付近の構造及び視認性の向上の検討。 ○講義棟屋上への看板の設置。 ○校内の植栽の剪定及び松くい被害木の伐採等により、景観の向上及び学習環境の整備に努める。																																																	
												自己評価：b	b	a	b	b																																												
																	○教職員による訪問校総数は、中网信地域を中心に40校87回。 ○オープンキャンパスは計4回実施、生徒66人、保護者55人が参加した。また、企業従業員家族向け見学会には24人が参加。 ○インターンシップは、駒ヶ根工業高校2年生13名、岡谷工業高校2年生1名を対象に3日間実施。（再掲）	○教職員による訪問校総数は、昨年度（26校45回）を上回り、高校への情報提供を強化した。 ○オープンキャンパスの参加者は前年度（生徒97人、保護者71人）と比べて減少し、魅力を直接体験してもらう機会を逸してしまった。 ○県教育委員会から「工業科と県立工科短大の一貫した学びを推進」が提案されており、南信地域の工業系高校への働き掛けを強化している。 ○引き続き、高校訪問やオープンキャンパスを通じて、中网信地域の高校生の本校に対する認知を高めていく必要がある。	b	a	b	a	○オープンキャンパスやインターンシップなど、直接工短の魅力に触れる機会をいかにつくるかがキーとなる。 ○教職員の高校訪問の増加や高校から南信工科短大にかけての一環した学びへの取組は、大変評価できる。今後も地道に継続すると共に具体的事例を積み重ねて行くことが必要。 ○人口減という社会現象の中、受験生は多い合いと言っても良いほど過酷な状況と言えるので、従来の魅力ポイントに何を加えるか、誰にどうアピールするか、もっと分析すべきと思う。 ○技術系高校への訪問はしっかり取り組まれているが、普通科の高校へもう少し力をいれてもらったらどうかと考える。	○高校訪問の充実 中网信地域を中心に高校ごとにタイミング（三者懇談、オープンキャンパスや出願期の時期）と説明内容を再検討し対応していく。 ○オープンキャンパスの充実 在校生の協力（当日の説明・案内、高校時代の担任教員や後輩への働き掛け）を得る。 ○強化対策 ・工業系高校：インターンシップを受入れる工業高校を増やす。高校の課題研究に対する学習支援を実施する。 ・その他の高校：教員（進路指導・担任教諭）の校内見学を新規開拓する。																																				
																									○取組ごとの発信の効果の分析とPDCAの実施。 ○科学ふれあいフェアにて開催するデザインコンクールの継続。 ○研究成果、活動状況などの積極的広報。	○デザインコンクールには5校、155名の応募があり、フェアのイベントとして表彰式を開催。（34点を表彰） ○上伊那地区高校理科教員研修会にて本学の取り組みを紹介。 ○諏訪工業メッセ・伊那市中学生キャリアフェスティバルへの出展、ファミリーマートチラシ掲載依頼・SBCラジオCM・日経新聞記事掲載の取組については、すぐに効果が確認されるものではなく、継続することが重要である。 ○近隣の高校と連携してイベントを実施することで、高校生への本学の認知度を向上させた。 ○ソーシャルメディアの活用は高校生を含めて更に一般化が進み、またHPの内容を充実したためアクセス数が伸びたと考えられる。	a	a	a	a	○活躍しているOBの力を借りるのも良い。 ○他の取組同様、教職員の努力は大変評価できる。 ○繰り返し継続していくことが必要だが、キャパにも限度があるため成果の分析、投資対効果の分析はもう少し強化して欲しい。 ○HPのアクセスが増加してるのは良いと思う。但し、その結果が気になる。アクセスした最初のトップページにより引きつける工夫が足りないことはないか。 ○広報は、一過性ではなく地道な取組が必要であるため、さらに継続した取組をお願いしたい。	○委員会メンバーを刷新し、全員で広報活動に当たり、新たな取組の導入もできるような検討する。 ○ソーシャルメディアは新入生の獲得において重要なツールとなっており、HPとSNS(インスタグラム・ユーチューブ)の検索回数の状況を分析し掲載内容等を検討する。 ○岡谷工業高校電気科の課題研究を共同実施する。 ○講義棟屋上への看板の設置。（再掲）																												
																																	○他の教育機関等と連携した学校のPR活動について、共同開催を模索。 ○飯田短大との連携協定の締結に向けた共同研究の実施。	○学校見学会は、金融機関、重点高校、市町村などと実施し、意見交換を行った。（6回、138人） ○飯田短大と咀嚼機能向上に関する共同研究（「かみかみ大使カミン」の共同開発）の研究成果についてプレス会見を開催し、テレビや新聞等の多くのメディアで報道。（再掲）	○見学会後の意見交換において、共同研究の実例紹介や企業の課題に対する相談に対応していることをPRするなど、積極的な連携を働きかけている。 ○飯田短大との連携協定に向けた取組みの実績を積み、早期の締結を目指す。	b	b	a	b	○他機関との連携により、効率的に広報していく方法を模索されると良い。 ○飯田短大との共同研究は大変良い事例と思う。各高校との連携協定が出来ればなお効果が上がると思う。 ○見学会も増えているのは良いが、意見交換の内容、反映が見えない。 ○飯田短大との連携について、さらに取組を進められたい。	○地域の高校及び協定を結んだ他の教育機関等と連携した学校のPR活動について、新たな取組の検討を行う。 ○飯田短大等新たな連携協定の模索と、協定に基づく取組のPRにより知名度向上を図る。																			
																																										自己評価：b	b	a	a	a														
																																															○受験生にとって魅力的な試験内容を導入。 ○南信地域の工業高校の受験生確保のため、夏休み期間中にインターンシップを実施。 ○オープンキャンパスを開催。 ○高校教員向け説明会の開催、個別高校見学の受け入れ、高校説明会への参加等を実施。 ○諏訪地区の応募者確保のため、「諏訪圏工業メッセ」に参加しブース展示。	○A0入試の敷居を低くするため、志望理由書の提出を廃止。 ○本年度の受験者数及び入学者数の状況 ・A0入試、校長推薦、事業主推薦、一般入試など計6回入試を行った。 ・受験者数合計：33（機械13+電気20）人、入学者：28（機械10+電気18）人 ○インターンシップは、駒ヶ根工業高校2年生13名、岡谷工業高校2年生1名を対象に3日間実施。（再掲）	○A0入試出願者が11名（前年度18名）と減少となった。4年制大学進学希望の高校3年生が多くなったためと推測される。 ○推薦（校長、特別）、一般入試については、合わせても22名とほぼ前年度と同じであった。 ○開校初年度のみ定員を充足したが、以後入学者の定員割れは続いている。 ○強化対策 高校の先生を介して行うため、浸透するのに時間を要する。	c	c	c	c	○特効薬はない為、地道な努力が必要。卒業生の社会に出てからの活躍や、編入学による進学を大々的にPRすると良い。 ○本項は上記取組も含めた積み重ねの結果であるため、受験者数、入学者数で割り切って評価する。定員に達して評価されるものしかない。 ○量、質の追求は悩みも多いが一喜一憂せず頑張って欲しい。 ○既に様々なご努力をされているものと思われるが、如何せん定員割れを起こしている状態であるため、さらなるご努力をお願いしたい。 ○一朝一夕に解決できる課題ではなく、すでに実施されているが、中学生以下の年代へのアプローチ（南信工科における学びの楽しさの周知）をより一層充実させることが一つの策かと思う。	○新たに推薦入試（中期）を設けて、受験機会を増やす。 ○強化対策（再掲） ・工業系高校：インターンシップを受入れる工業高校を増やす。高校の課題研究に対する学習支援を実施する。 ・その他の高校：教員（進路指導・担任教諭）の校内見学を新規開拓する。 ○キッズものづくりフェアや諏訪メッセ等を通して、高校生以下の生徒・児童への働きかけを、より一層充実する。 ○より効果的な取組みを検討するため、高校別や試験区分別等、過去の受験状況を分析する。 ○編入学試験の合格実績を志願者確保に結び付ける方策を検討、実施する。					
																																																								自己評価：c	c	c	c	c

（評価基準）

小項目（取組単位評価） s:事業計画を大幅に上回る a:事業計画を上回る b:事業計画を実施 c:事業計画はやや遅れている d:事業計画を十分に実施せず
小項目（評価項目単位評価） s:事業計画を大幅に上回る a:事業計画を上回る b:事業計画を概ね達成 c:事業計画を下回る d:事業計画を大幅に下回る
大項目評価 S:事業計画の進捗は優れて順調 A:事業計画の進捗は上回って順調 B:事業計画の進捗は順調 C:事業計画の進捗はやや遅れている D:事業計画の進捗は遅れている